

▼シリーズ「適疎な地域づくり」

故郷に戻る今、改めて“適疎な地域づくり”を考えてみる

鉄建建設株式会社 顧問

酒井 喜市郎



◇ 故郷に帰る今

高校を卒業と同時に故郷岐阜を離れ、大学を卒業後に現在の会社務めをスタート、そして今 47 年の会社人生が終わりを迎えようとしています。その最後の 7 年にわたり「土木と市民社会をつなぐ事業研究会」通称「CSV 研究会」に参加し、所属する会社の外から建設業界を俯瞰し、社会の中で建設業がどのようにあるべきかを考える機会を与えて頂いた事に、心から感謝しています。そしてこの機会に現在研究会が進めているテーマ「適疎な地域づくり」について改めて故郷岐阜から見て見ることで、適疎とは何かを考えてみたいと思います。

◇ 故郷岐阜市とは

まず私の故郷岐阜市の基本情報から見て見ましょう。岐阜市は人口約 40 万人、岐阜県の県庁所在地で、JR 東海道本線、高山線の岐阜駅、名鉄本線の名鉄岐阜駅のある駅周辺エリアと、岐阜市役所や繁華街「柳ヶ瀬」がある市内中心部エリア、岐阜公園・岐阜城がある旧城下町エリアなどに分かれ、その周りを住宅地や農地が中心部を囲う、面積 203.60km² の中部地方の中核都市です。

市の北側を鶉飼いで有名な清流長良川が流れ、濃尾平野の北端に位置する風光明媚な町ですが、岐阜市は県の最南部に位置し、JR 東海道線で名古屋まで 20 分弱と、とても便利なところにあります。

かつては岐阜駅前には全国にその名を轟かす大繊維問屋街が広がり、東海地方全域に分布した紡績工場と共に一大繊維産業が栄え、多くの関係者が岐阜に仕事を求めて集まってきていましたが、繊維産業の衰退と共にこれらの施設が廃業・撤退となり、現在ではかつての面影はありません。また名古屋からの距離が近すぎることも原因で、それまで人は岐阜へと集まってきましたが、現在では多くの人は名古屋へ向かうことが多くなっているようです。また周辺部に大規模な商業施設が数多く建設され、買い物客は市中心部から郊外へとその流れが顕著になっています。かつて美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」で全国的に有名になり、全国から集まる多くの人で賑わって



岐阜中心部（3つのエリア）地図

また周辺部に大規模な商業施設が数多く建設され、買い物客は市中心部から郊外へとその流れが顕著になっています。かつて美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」で全国的に有名になり、全国から集まる多くの人で賑わって

いた柳ヶ瀬の繁華街・歓楽街も、これらの人たちの足が途絶えるのと並行し、現在ではシャッター街でその名を全国に知られるようになってしまいました。

◇ 柳ヶ瀬の変遷

ここで少し柳ヶ瀬の変遷を見て見たいと思います。

柳ヶ瀬は明治の中頃からその名前が見られ、大正時代になると博覧会ブームで「内国勸業博覧会」が柳ヶ瀬で開催され、商業の街として大きく発展してきました。戦後には柳ヶ瀬地区は百貨店をはじめとする商業地域に、西柳ヶ瀬地区は劇場や飲食店が林立する歓楽街へと発展し、一時は東海地方随一の歓楽街として発展していました。その頃「柳ヶ瀬ブルース」が全国的にヒット、全国各地から多くの人々が柳ヶ瀬に吸い寄せられていました。

しかしその後鉄道の利便化、市内電車の廃止、繊維産業の衰退、そして最後の打撃となった大規模小売店舗法の改正による郊外の複数の大規模商業施設の設置により、住民の足は名古屋へ、また自動車により郊外へと向かい、全ての百貨店は撤退、柳ヶ瀬は日本一のシャッター街と言われるまで衰退しました。

◇ 岐阜市および周辺の名所

岐阜県は周囲を7つの県に囲まれ、海がないことでも知られています。しかし木曾、長良、揖斐の大河3本が岐阜県を南下し濃尾平野を縦断、福井、石川、富山、長野との県境にはそれぞれ日本を代表する山脈を望み、高山、白川郷、白山、下呂温泉、飛騨温泉郷、馬込宿、美濃和紙、関の刀剣、関ヶ原古戦場、織田信長で知られる岐阜城や日本3大仏の一つとされる正法寺の岐阜大仏、長良川の鶺鴒など、名所には事欠きません。今は亡き私の母に言わせると「岐阜には海は要らん、山も河もある」が口癖で、それほど住みやすく、心豊かにするところでした。

しかしこれらの観光資源も岐阜県の中心都市である岐阜市に活気を増大させることはなく、いつの間にかシャッター街の岐阜、が定着してきました。

◇ 町の活気を取り戻す

このような状況を打破するため、官主導により柳ヶ瀬地区も岐阜駅前と合わせて都市再生緊急整備地域指定を受け再開発が進み、柳ヶ瀬に隣接する市役所付近の再整備・建替えもなされ、町は見違えるようにきれいになりました。ただ同時に市中心部の至る所



最近の柳ヶ瀬本通



昭和41年頃の柳ヶ瀬本通



大規模店舗（イオンモール）



大規模店舗（モレラ岐阜）

に駐車場が見られるようになり、県内最後の百貨店である岐阜高島屋も 2024 年7月に閉店となり、跡地利用については現在でもまだ決まっていない状況です。一方高島屋南側に隣接する場所には超高層（35 階建て、低層部が商業施設）の分譲住宅が建てられ、さらに市では隣接する金公園の再整備や大学の誘致も検討中で、官主導ではあるものの、これまでの歓楽街柳ヶ瀬のイメージは大きく変わりそうな予感があります。

このような中、柳ヶ瀬周辺の路線価低下の影響もあり、最近柳ヶ瀬地区への店舗出展数が増加に転じています。これまでのように大型商業施設に人が集中していた時代から、個性的な小さな店が点在する、分散型のまちづくりへ、柳ヶ瀬もそんな次のフェーズに入りつつあるようで、空き店舗を活用した取り組みも少しずつ始まっています。小さな飲食店、アトスペース、ギャラリー、シェアオフィス、こうした新たなプレーヤーたちが「柳ヶ瀬でやってみよう」と集まり始めています。柳ヶ瀬には柳ヶ瀬らしい建物、柳ヶ瀬らしい人の流れがある、地元の人が気軽に立ち寄れる、回遊性のある街の方がこれからの時代には合っているのではないかと、柳ヶ瀬商店街振興組合の理事長もお話されています。

さらに住民主体での柳ヶ瀬を元気にする試みも出てきています。柳ヶ瀬で商売をしていた人々が、「街に新しいお客さんと呼び込もう！」と考えてイベントを始めた組織「サンデービルディングマーケット実行委員会」が発展し、新たに「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社」として発足、現在は毎月第3日曜日と偶数月の第1日曜日にイベント「サンデービルディングマーケット」、毎月第4日曜日には「GIFU ANTIQUE ARCADE」が開催されるなど、毎回飲食や物販などの100を超える店舗が並ぶようになったそうです。

このような状況で官民が同じ方向に向くことにより、少しずつではありますが柳ヶ瀬も元気を取り戻しつつあります。

◇ 適疎な町と感ずる町にするために

皆が住みたいと感ずられる町、すなわち適疎な町にするためにはいくつかの要素が必要です。

- ① 住民や当事者の強い意志、これが第一で、何をしてもこれがなければ前には進みません。
- ② 官と民が連携すること、どちらかだけの動きではいずれ破綻が来ます。
- ③ 町を造るためのノウハウ、情報も重要です。
- ④ これらの重要な要素をマネジメントし、それぞれの利害者・関係者を一つの方向に導くためのスキル、あるいはスキルを持ったチームの活用。

これにより関係する全員にメリットが感ずられる状況をつくることこそ、まちを持続的に次の世代に繋いでいくためには重要ではないかと思えます。



岐阜駅前の状況



サンデービルディングマーケットの状況

では岐阜の事例を見て、①～④についてはどうなのか検証してみます。

①については、先述の「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社」の皆さんや、柳ヶ瀬商店街振興組合の加盟店の皆さんもここへ来て強い意志を持ち始めています。彼らはこのままでは柳ヶ瀬の未来は無い、なんとかして柳ヶ瀬に活気を取り戻したい。しかもかつてのような大型店舗による集客ではなく、それぞれ個性のあるお店などにより地域を盛り上げ、周辺地域と合わせて回遊できるまちづくりをしたい、との強い意志が感じられます。あるオーナーは、「日本一のシャッター街と言われてから逆に注目度が上がり、再注目されやすい。今がチャンスだと思う」と言うような力強い言葉も出始めています。この動きが町全体に広がれば、自ずと結果は出てくるのではないのでしょうか。

②について岐阜では大きな問題があると思います。駅前の再開発など、行政側からの視点による様々な施策が進められてはいますが、個別の住民の意見がどれだけ勘案されて進められているかはよく見えない状況です。やはり官民が協働して物事を進めることが第一だと思います。

さらに高島屋跡地開発についても、オーナーと店舗の間での諸問題について、行政の意思がよく見えてきません。一等地の取り扱いを個別の問題としてみるのではなく、地域全体の問題として行政も共に取り組む、そのような姿勢が大切かと思えます。

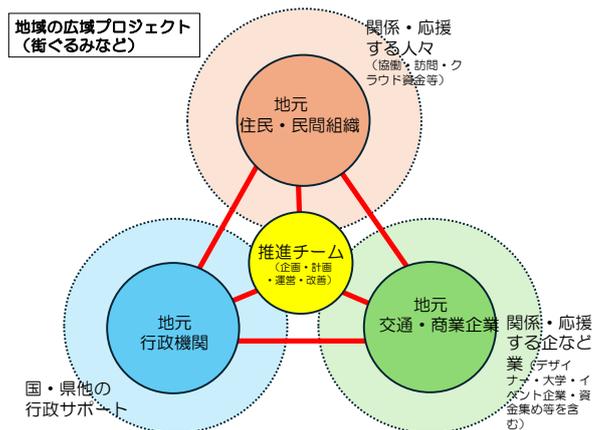
③のノウハウについては、現在取り組んでいる「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社」では、日本各地での事例を視察し、それを参考に進めているとのこと。ただ、個別に視察に行くのも限界があり、それぞれの特徴や地域性もあり、さらに良い事例やノウハウをもった地方がある可能性もあります。これらの情報をどのように集めるのか、これがヒントになりそうです。

④は③にも通じるところで、このようなノウハウや組織をどのように活用していくか、まだまだそのような状況ではないと感じられます。

現在研究会では、適疎なまちづくりを進めていくためのイメージの検討を進めており、その一例が右図になります。まちづくりを支えていく当事者それぞれが個別に様々な取り組みを進めていますが、その進め方が最も適しているのか、他にもっと良い事例はないのか、それを実行していくために支援する団体をどのように見つけていくのか、そのためのキーとなるチームが必要だと考えられます。

中心に位置する「推進チーム」は我が研究会をイメージしていますが、まちづくりのどの段階にあるかによりその役割や立場が大きく異なると思います。最初はず「知恵袋」のような形で関わりを持ち、各段階により様々な構成に発展させ、場合によってはメンバー所属会社がその力を発揮する、そのような組織ではないかと考えています。

私としてはこれまでの経験や人脈を活かし、他のメンバーとの連携をしつつ、どうすればこのような形で岐阜を良い町にすることが出来るか、微力ではあるものの何らかの関わりを持っていきたいと考えています。そうすれば、岐阜は冒頭に述べた数多くの文化的に優れ、自然豊かな大きな資産を持っており、これらと連携することで一つの大きな「適疎な地域」が構成できるのではないかと考えています。是非多くの方の御支援、御賛同を頂けるようお願いして筆を置きます。



適疎な地域づくりのイメージ事例（研究会）